様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ１３０１０

研究課題名（和文）中国紹興方言における結果持続・進行・完結表現の包括的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study on Resultative, Progressive, and Perfect in the Shaoxing dialect of Chinese.

研究代表者
宋　天鴻（SONG, TIANHONG）

関西外国語大学・英語国際学部・准教授

研究者番号：００８４５４８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：中国紹興方言では、結果持続と進行を表す表現は、「Vダ(帯)/ Vドン(口に冬)/ Vハン(亨)」、「レ(来)ダ/レ(来)ドン/レ(来)ハン」のように三体系に分かれている。「ダ」「ドン」「ハン」はそれぞれ存在事物が話し手の可触領域内、聞き手の可触領域内、話し手と聞き手の可触領域外に位置する場合に用いられる。そして、「ドン」は聞き手への配慮がコード化される間主観性の用法もある。文末助詞「哉」は新しい状況の出現済みを表し、具体的には「変化の実現」、「変化過程の出現済み」、「計画行為を実施する時の到来」などの用法を持つ。「哉」は相対的過去テンスを表し、パーフェクトマーカーである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、中国紹興方言のアスペクト表現「(レ)ダ/(レ)ドン/(レ)ハン」及び「哉」の意味機能を考察し、中国語の方言のアスペクト表現の類型論研究にデータを提供する一方、「ダ」「ドン」「ハン」の使い分けを考察することによってダイクシス研究への貢献を目指す。

研究成果の概要（英文）：The resultative and progressive aspects of the Shaoxing dialect are divided into three systems: “V-da/dong/hang” and “leda/ledong/lehang.” “Da” is used when the object is within the speaker's reachable realm, “dong” is used when the object is within the hearer's reachable realm, and “hang” is used when the object is outside the speaker's and the hearer's reachable realm. Additionally, “dong” also has a usage in expressing intersubjectivity, where the speaker's consideration for the hearer is encoded. The sentence-final particle “tse” signifies the occurrence of a new situation. “Tse” has specific uses, such as indicating the emergence of a change, the initiation of a change process, or the arrival of the opportune moment for executing a planned action. Furthermore, “tse” indicates the relative past tense and is a perfect marker.

研究分野：言語学

キーワード：紹興方言　アスペクト　ダイクシス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

紹興方言は、中国語呉方言太湖片臨紹小片に属する。紹興方言では、普通話(Mandarin Chinese)とは異なり、結果状態の持続や動作の進行を表す形式は三体系に分かれている。

<1>画挂带/咚/亨客厅里。(絵はリビングに掛けてある。)

<2>小王来带/来咚/来亨看书。(王さんは本を読んでいる。)

紹興方言では、例<1>のように、一般動詞の後に“带[da]”“咚[doŋ]”“亨[haŋ]”を付加して結果状態の持続を表す。例<2>のように、所在を表す動詞“来[le]”の後に“带”“咚”“亨”が付く形で動作の進行を表す。“V 带”“V 咚”“V 亨”と“来带”“来咚”“来亨”は、それぞれ普通話の“V 着”と“在”に該当する表現である。

陶寰(1996)、Ling(2008)、盛益民(2021)では「物理的距離」という基準、そして、宋天鴻(2015)では「可視性」という基準から、“带”“咚”“亨”の使い分けを分析している。しかし、それらの基準だけでは“带”“咚”“亨”の使い分けを適切に説明できていない。さらに、宋天鴻(2021)では、「存在事物へのアクセスに対する制御権」という新たな基準を導入し、平叙文と疑問詞疑問文において、“带”“咚”“亨”の使い分けを考察したが、話し手と聞き手が存在事物に対する制御権が拮抗している場合の使い分け、命令文や諾否疑問文における使い分け、現在と過去の出来事を語る際における使い分けの差異などには言及されていない。時間領域に属するアスペクト表現が空間要素によって使い分けられるのは、紹興方言の特徴と考えられるが、“带”“咚”“亨”の使い分けに関しては、検討の余地が残されている。

そして、紹興方言では、動作や変化の終結点を捉える文末助詞“哉[tse]”は、普通話の文末助詞“了”に該当するものである。“哉”は、「ある種の新しい状況の出現済み」または「出現間近」を表すと指摘されてきた（陶寰 1996、盛益民 2021 など)。しかし、「出現間近」の“哉”は未来表現のはずであるが、未来を表す時間詞と共起することができない。この言語現象をどのように説明すれば良いかを含め、文末助詞“哉”の意味機能に関しては更なる検討が必要である。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では、紹興方言における結果持続、進行、完結表現について包括的に考察する。具体的には、“带”“咚”“亨”の使い分けを新たな基準において分析し、ダイクシス（直示）研究への貢献を目指す。また、文末助詞“哉”の意味機能について考察を行い、中国語のアスペクトの研究及び方言の類型論研究にデータを提供したい。そして、若者が方言離れしている昨今において、方言保存に貢献したい。

３．研究の方法

(1)本研究で使う例文について、筆者は中国浙江省紹興市の出身で、紹興方言の母語話者である。紹興方言のコーパスや文字で書かれた書籍がほぼ見当たらないため、本研究で用いる例文は、筆者が日常生活において集めたものと筆者による作例である。作例に関しては、“带”“咚”“亨”の例文は 3 名、“哉”の例文は 2 名の母語話者による客観的なチェックを経たものである。

(2)“带”“咚”“亨”の使い分けに関しては、筆者の博士論文(宋天鴻 2019)を踏まえて、「可触領域」(話し手/聞き手が随時アクセスできる領域）という新たな基準を導入し、「平叙文」「命令文」「疑問文」「既然事態」に分けて、その使い分けを総合的に考察した。「可触領域」は「物理的アクセスによって到達できる領域」以外に、「五感によってアクセスできる領域」、「当該情報を探索できる領域」なども考えられる。

(3)“哉”については、動詞の事象タイプに基づいて“V(P)哉”の意味用法を新たに分析した上で、“V(P)哉”が“快”“要”“就”などの副詞と共起する例を考察することにより、その意味機能を包括的に考察した。

４．研究成果

(1)“带”“咚”“亨”の使い分けについて

本研究では、「可触領域」（話し手/聞き手が随時アクセスできる領域）という新たな基準を導入し、「平叙文」、「命令文」、「疑問文」、「既然事態」に分けて、“带”“咚”“亨”の使い分けを包括的に考察し、結論を次のようにまとめた。“带”“咚”“亨”はそれぞれ存在事物が「話し手の可触領域」、「聞き手の可触領域」、「話し手と聞き手の双方の可触領域外」に位置する場合に用いられる。「可触領域」は次のような基準によって決定づけられる。

①平叙文や命令文において、「可触領域」は基本「物理的距離」によって決まる。話し手に(より)近い領域は「話し手の可触領域」、聞き手に(より)近い領域は「聞き手の可触領域」、話し手と聞き手から離れた場所は「話し手と聞き手の双方の可触領域の外」に属する領域であると考えられる。また、存在事物が話し手にも聞き手にも近い場合は、一般的には「話し手の可触領域」に位置すると見なされ、“带”が用いられる。

②存在事物が聞き手に近い場所（観念上の場所も含む）に位置し、かつ、聞き手に存在事物へアクセスするよう促す場合は、存在事物と話し手との距離関係が捨象され、存在事物が「聞き手

の可触領域」に位置すると見なされ、“咚”が用いられる。この場合は、話し手が聞き手の視点に立ってナビゲーションをしていると分析でき、この“咚”は、聞き手への配慮がコード化される間主観性の用法と考えられる。

③視覚や聴覚など五感によって事物の存在を捉える場合は、「可触領域」は「五感によってアクセスできる領域」と解釈される。

④疑問文においては、基本的に「情報の帰属先」によって「可触領域の帰属」が決められ、“带”“咚”“亨”が使い分けられている。但し、存在事物が話し手と聞き手の双方から離れたどの場所に位置するか、またはその離れた場所に位置しているかどうかを問う際には、「物理的距離」による基準が適用され、“亨”の使用が決定づけられる。

⑤既然事態（過去の位置）を表す際に、“带”“咚”“亨”は、基本非過去（現在、未来）の位置を表す際と同じように使い分けられているが、以下の点では異なる。

1)存在事物が現在話し手と聞き手のどちらにも近い場合は、「どちらかにより近いか」によって“带”と“咚”を使い分けている。それに対して、存在事物が過去に話し手に近かった場合は、存在事物と聞き手との距離関係が捨象され、“带”が用いられる。

2)“带”は「話し手の可触領域」を表し、基本疑問文には用いられないが、存在事物が過去に特定の場所に位置していたかどうかを問う場合は、「情報の帰属先」ではなく、文面上に現れる場所、話し手、聞き手の三者の「物理的距離関係」によって、“带”“咚”“亨”が使い分けられている。

(2)“哉”の意味機能について

紹興方言の文末助詞“哉”は、普通話の文末助詞“了”に該当するものである。従来の研究では、“哉”は「ある種の新しい状況の出現済み」または「出現間近」を表すと指摘されてきた。本研究では、動詞の事象タイプに基づいて“V(P)哉”の意味用法を新たに分析した上で、“V(P)哉”が“快”“要”“就”などの副詞と共起する例を考察することにより、結論を次のようにまとめた。“哉”は「新しい状況の出現済み」のみ表し、具体的には「変化の実現」、「変化過程の出現済み（趨勢)」、「計画行為を実施する時の到来（宣言、命令)」などの用法を持つ。これらの用法は全て「既然事態」を表す。そして、“哉”は相対的過去テンスを表し、パーフェクトマーカーであると考えられる。

＜引用文献＞

盛益民(2021)『呉語紹興（柯橋）方言参考語法』, 北京：商務印書館。

宋天鴻(2015)「紹興方言の所在表現“来带”“来咚”“来亨”」, 『中国語学』第 262 号:153-167 頁。

宋天鴻(2019)『中国紹興方言における“带[da]”“咚[doŋ]”“亨[haŋ]”の包括的研究』,東京大学大学院博士学位論文。

宋天鴻(2021)「紹興方言の存在表現“V 带”“V 咚”“V 亨”」,『関西外国語大学研究論集』第 113 号：135-150 頁。

陶　寰(1996)「紹興方言的体」, 張雙慶主編『動詞的体』: 302-330 頁。香港：香港中文大学中国文化研究所呉多泰中国語文研究中心。

Ling, Jinchun.(2008) *On the Grammatical Function and Status of “da^{33}” “doŋ^{33}” and “haŋ^{33}” in Shaoxing Dialect*. The Chinese University of Hong Kong, MA Research Paper.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 宋 天鴻	４．巻 117
２．論文標題 紹興方言的句末助詞“哉”	５．発行年 2023年
３．雑誌名 研究論集 = Journal of Inquiry and Research	６．最初と最後の頁 145～161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00008073	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 王 蘭，牛 承彪，宋 天鴻，韓 寧爛，蘇理 剛志，永池 健二	４．巻 15
２．論文標題 周作人「童謡論資」注釈(その一)	５．発行年 2022年
３．雑誌名 歌謡:研究と資料	６．最初と最後の頁 166-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 宋天鴻
２．発表標題 从(交互)主観性的角度看紹興方言的“V帯”“V[口に冬]”“V亨”
３．学会等名 日本中国語学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関